

日本におけるインド音楽教育

新井 剛

はじめに

北インド古典音楽（ヒンドウスターニー音楽）の伝統的教育法は、子孫や限定された弟子が師とともに生活しながら訓練を受けるというきわめて個人的なものである。そこでは、弟子に対して手取り足取り教えるということはない。芸術的な技巧や観念などは、師の演奏の模倣や師との対話によって伝達される。

一方、日本のシタール教室においては、レッスン時間が設けられている。楽器の構えかた、奏法、特殊技巧などが丁寧に教えられ、また、音階、メロディー、リズムの概念が理論的に説明される。

日本でシタール教室が開始されてから、既に20年以上経過している。にもかかわらず、その研究は今だ皆無といえる。本稿の目的は、これまでに行った東京都内五つのシタール教室の調査報告である。これは、

インドの伝統的教育法を踏まえた上で、日本のシタール教室における教育とインドにおける現状とを比較し、そこに見られる違いの社会的、歴史的背景を探ろうとする研究の基礎段階のデータとなるものである。

1. 調査概要

2001年11月から12月にかけて、東京都内にある五つの教室をそれぞれ以下の点について調査した¹⁾。第1に、指導者の経歴であるが、これには、出身地、誰に師事してきたのかという、指導者の教育法に直接関係する重要な要素が含まれている。第2に、教室開始時期、生徒数、レッスン日などの各教室の沿革を述べる（表1）。そして第3としてレッスン内容すなわち、レッスン時間、おおまかな流れ、指導方法について考えていきたい（表2）。

表1 東京都内のシタール教室（2001年11～12月調査）

教室名	教室の場所	指導者	生徒数	レッスン日
アミット・ロイ インド音楽教室	名古屋、兵庫（尼崎）、東京（品川）	アミット・ロイ（カルカッタ）	22(東京)	月1回金土日月
小俣スシュマ シタール教室	東京 田端	小俣スシュマ（ネパール）	3	週1回
加藤貞寿 シタール教室	東京 渋谷	加藤貞寿	25	週1回土日
J・I・N Music Association	東京（荻窪）、仙台、神戸、福岡	中村 仁	20(東京)	平日週1回（東京）
プレーマダーサ音楽学習室	東京 足立	プレーマダーサ・ヘーゴダ（スリランカ）	35	週1～2回

表2 各教室のシタール教育法

指導者名	時間	楽器	調弦	指導に使用する楽器等	ノートへの記譜	テープ、MDへの録音
アミット・ロイ インド音楽教室	90分	生徒持参	演奏弦、共鳴弦	シタール、タブラ、歌	○	○
小俣スシュマ シタール教室	60分	教室のもの	演奏弦のみ	シタール、歌	○	○
加藤貞寿 シタール教室	30～60分	教室のもの	演奏弦のみ	シタール	○	○
J・I・N Music Association	30分	教室のもの	演奏弦のみ	シタール、タブラ	○	○
プレーマダーサ音楽学習室	60分	教室のもの、生徒持参	演奏弦、共鳴弦	シタール、タブラ	○	○

2. 調査結果

(1) アミット・ロイ インド音楽教室

指導者の経歴

1959年、シタール制作者として名高いヒレン・ロイの息子としてカルカッタに生まれる。幼少のころより父親から音楽を学び、後にサントーシュ・ベナルジー師に師事。さらに国際的に活躍したシタールの巨匠、故パンディット・ニキル・ベナルジー師のもと、師とともに生活しながら学ぶという伝統的な音楽訓練を受ける。現在名古屋在住。演奏家・指導者として活動している日本人には、氏に学んだ経験を持つ人が多い。

教室の沿革

東京教室は1996年から開始されている。それ以前も名古屋で教室を開いていたが、生徒が3人あつまり開始に至った。生徒数は現在23名で、そのうちシタールを習っているのは15名である²⁾。レッスン日は月1回、土日ははさむ4日間指導者を招いている。教室の代表者が生徒らとEメールや電話で連絡をとり日程を決めている。

レッスン内容

1レッスンはおよそ90分であるが、レッスン後も指導者や他の生徒と会話をしたり、他の生徒のレッスンを見ていく生徒が多い。全生徒は自分の楽器を持参している。レ

スは、次のような流れで構成されている。まず、タラフ弦³⁾、演奏弦の調弦をする。調弦はタンプーラマシン⁴⁾のドローンを聞きながら行っている。これは経験がないと難しいものなので、生徒が初心者の場合には指導者がする。調弦を自分でできる生徒でも、指導者が微調整をすることがある。そして、生徒は練習してきた前回の課題を弾き始める。それに対して指導者は、随時アドバイスをしてゆく。指導者は音名で歌うか楽器を弾き、それを生徒がオウム返しに弾いていくというかたちである。その際、ノートへの記譜、テープ・レコーダーやMDへの録音という方法もとっている。ある程度課題を消化できていれば、新しい課題を与えられる。

(2) 小俣スシュマ シタール教室

指導者の経歴

ネパール出身の小俣スシュマ氏は、シャンティニケタンにある大学で、複数の指導者に音楽を学んだ。来日後は東京芸術大学で実践を含む北インド古典音楽の授業を担当している。

教室の沿革

教室開始時期は、はっきりしていないが、来日した1970年代からと思われる。自宅教室へ通う生徒は現在3名である。レッスン日は週に1回で、指導者が各生徒と相談し

て日程を決めている。生徒数が少ないためか、生徒が他の生徒のレッスンをみるということはあまりないようである。

レッスン内容

1レッスンは60分程度である。指導者の自宅に着いて、すぐレッスンが始まるのではなく、しばらくはお茶を飲みながら世間話などを行っている。生徒は自分の楽器は持参せず、教室にある数台の楽器を使っている。レッスンが開始されると、生徒は数台ある教室の楽器を一台手に取り、演奏弦の調弦をする。指導者に何を練習してきたのか尋ねられ、前回の課題をくり返し演奏する。それに合わせ指導者はアドバイスをしていく。そして、新しい課題がいくつか与えられる。指導者は楽器を弾いたり、歌いながら指導している。また生徒はテープレコーダーでレッスンを録音する場合もある。

(3) 加藤貞寿 シタール教室

指導者の経歴

父は声楽家、母はピアニストという恵まれた音楽環境の中、幼少よりクラシックピアノを学ぶ。1993年に渡印した際、インド音楽界の重鎮にして至宝とされるシタール奏者、パンディット・モニラル・ナグ氏の人柄とインド音楽の即興性に魅せられ、シタールに転向する。外国人としては唯一人、モニラル・ナグ氏の最高のクラス「シニアー」に所属。現在は日本とカルカッタを往復し、指導と演奏活動をしている。

教室の沿革

加藤氏はモニラル・ナグ氏の奨めから、1999年より指導を始めている。生徒数は現

在30名程度であるが、定期的に通っているのは20～25人程度ということである。生徒は学生、主婦、サラリーマンなどであるが、仕事が忙しいなど、他のさまざまな事情で休みがちになる生徒が出てくる。これはどの教室にもいえることだろう。レッスン日は月4回、指導者と生徒との相談で日程を決めている。調査当日は生徒4人のレッスンが行われていた。

レッスン内容

初心者の場合、1レッスンはおよそ30分であるが、2年以上経験があり、ある程度演奏できる生徒の場合は60分位であった。生徒は教室の楽器を使用している。おおまかな流れとしては次のようになる。指導者が調弦を済ませた後、生徒は練習してきた前回の課題を弾き始める。それに対して指導者は、随時アドバイスをしてゆく。レッスン中、指導者は楽器を常に弾いている。何度も繰り返させ、体得するのが基本であるが、生徒の理解のために必要な場合は、ノートにフレーズのメモをしている。自分でリズムを保持できるようになるため、4拍ごとに足を打つように指導している。この教室では、録音機材を使用する生徒は見られなかった。

(4) J・I・N Music Association

指導者の経歴

指導者の中村仁氏は73年から83年まで、ベンガル州シャンティニケタンにあるインド国立ヴィシュヴァ・バティ大学音楽学部在籍し、複数の教授に指導を受けた。帰国後は演奏家・指導者として活動している。

教室の沿革

中村氏は帰国後の1983年より東京(荻窪)で教室を始めた。現在は神戸、仙台で教室を開いている。また、カセット・テープのやりとりによる通信講座も行っている。東京の生徒数は20名位である。シタールの他に、エスラジ⁵⁾、タブラを習う生徒がいる。レッスン日は週1回、生徒の都合にあわせ相談で決めている。

レッスン内容

1レッスンはどのレベルの生徒でも30分である。生徒は自分の楽器を持参しておらず、教室の楽器を使用している。おおまかな流れとしては、まず、部屋に置いてある教室所有の楽器を手に取り、調弦をはじめ。生徒は練習してきた前回の課題を弾き始める。それに対して指導者は、随時アドバイスをしてゆく。ある程度課題を消化できていれば、新しい課題を与えられる。指導者はガットやターンがメモされているノートを確認しつつ指導している。ガットやターンを生徒が練習しているときはタブラを叩き、二つの楽器がどのように絡むのかということも説明している。

(5) プレーマダーサ音楽学習室

指導者の経歴

プレーマダーサ・ヘーゴダ氏はスリランカ出身である。シタールの巨匠ラヴィ・シャンカル師に師事した。来日以降は演奏活動の他、高崎芸術短期大学でインド音楽講師をつとめている。

教室の沿革

もともとインド音楽を教えるために来日

したという氏は、1974年から指導している。現在の生徒数は35名で、リコーダー、フルート、バイオリン、ギターなどシタール以外の旋律楽器でも習うことができる。また、タブラも教授されている。

指導者の自宅教室なので、在宅時にはいつでもレッスンを受けることができるようであるが、大方の生徒が週1回の頻度で通っている。

レッスン内容

1レッスンはどの生徒も60分程度である。調査した日は習い始めて半年の生徒、5年ほど通っている生徒のレッスンが行われていた。レッスンの流れは次のようになる。まず、演奏弦、共鳴弦の調弦をする。なれている生徒は自分で調弦をしていた。生徒は練習してきた前回の課題を弾き始める。それに対してアドバイスがなされる。ガットをくりかある程度課題を消化できていれば、新しい課題を教授される。レッスン中、指導者はシタールかタブラどちらかを演奏しつつ聞いている。シタールなど旋律楽器を習う生徒には、リズムの訓練の必要性からタブラも同時に教授している。生徒は、自分のレッスンの順番が回ってくるまで、前の人のレッスンでタブラ伴奏をしている。これは、他の教室には見られなかったことである。

おわりに

以上、東京都内の五つのシタール教室について、概観してきた。全体の傾向として、以下の点が指摘できる。

① シタール以外に、タブラ、声楽、エス

ラジ、サロッド、なども教授されている。この原因として、シタール演奏には必ず打楽器のタブラが伴うこと、また、インド音楽の器楽様式は声楽様式を基礎としており、楽器が違っても演奏する内容は同じであることなどがあげられよう。

- ② どの指導者も、自分の師の教育法を踏襲し、個人レッスンを重視している。これは、シタールの教育法の個人的性格、西洋音楽のように体系化がなされていないことが要因であろう。
- ③ レッスン日が指導者と生徒との話し合い、または教室の代表者の管理によって決められている。週1～2回、月1～2回という場合が多い。
- ④ 論理的に理解できる部分（例えば、音階、リズム、曲にこめられた情感など）は、口頭で説明している。
- ⑤ 指導者はガット⁶⁾ やターン⁷⁾ を生徒のノートに記述している。
- ⑥ テープレコーダーやMDなどの録音機器を使用している。

このうち、①②は伝統的教育法を受け継いでいる部分、それ以外は伝統的教育法にはないものである。だからといってこれらが、日本的な教育法に変化したものだと結論づけることはむずかしいだろう。まだ確認できていない教室の検索、より詳細なデータ収集のため、くり返し教室を訪問することを、今後の課題としたい。

注

- 1) 各教室のレッスンのデータ収集には、指導者や生徒から得た情報に加え、インターネット上で公開されているインド音楽関連サイトが役に立った。主に参照したホームページを以下に記す。
 - ・天楽企画
<http://www.pure.ne.jp/~tengaku/>
 - ・笛屋歓喜店
<http://www.pure.co.jp/~fueya/>
- 2) シタールの他に、声楽、サロッド、エスラジ、タブラを学ぶ生徒がいる。
- 3) フレットの下に張ってある共鳴弦。11～13本あり、ラーガで使用する音階に調弦する。
- 4) タンブーラの音を再現する電子楽器。タンブーラの奏でるドローン（通奏持続音）はインド古典音楽に欠かすことができない。
- 5) 北インドの代表的な擦弦楽器のひとつ。フレット、共鳴弦があり、シタールと奏法が似ている部分がある。
- 6) シタール演奏における、一定のリズム周期ののった部分。タブラ伴奏が入る。
- 7) ガットの即興部分。